

北京騷擾 その一

中島八十一

一九八九年のことなり。中國の國際學會開催に名乗り上ぐるは余の所屬せる學術領域にては絶えて聞かざることにして、アジアンかと思ひしに世界と聞きてさらに驚きたり。シノフィル（中國愛好者）の余なればこの機逃す能はず、そも彼の地を訪れしことなし。参加を促し居る一通の手紙は英語にて書かれたり。差出人即ち大會長は北京協和醫學院（PUMC）の醫師にして、名より判ずれば女人なり。假にタンさんと呼び置かむが、この佳人は従來業界に知らるること絶えて無し。PUMCの清朝末期におきて米國ミッション系醫院として設立を見たる後、ロックフェラー財團の強力なる後押し受け中國第一等の醫學校となりたり。かく述べたるに招請狀の質素なること他の郵便物に紛るるも見出すこと容易なり。便箋の紙質悪きに觸るるのみにて裂けんばかりか、活字のアルファベットも垢抜けしたるとはほど遠き代物なりけり。さりながら不愉快なる印象を持たせざるはPUMCの歴史性に根差したる品位の紙一重にて封書の粗末なるを上回りたるがゆゑならむ。タンさんいかやうなる人物なりや、そを知ること自體の樂しみとして次第に膨らみつつありて、出席の返事を封筒に詰めたり。

言はば北京放送世代なり。多感にして世情落ち著かざる時期に文化大革命の情報リアルタイムに次々に耳にせり。夜半に大音量で告ぐるラジオ放送に大陸僅か先にありしかと感ず。余の父、兵士として中國に渡りたれ當時の寫眞が残り。父の所屬する部隊は北京に入城せず城壁を臨んでいくばくもなく移動したるに、現地にてはペキンにあらでペイチンと發音すと語りき。法事ともなれば一族の大人たち必ず話題にしたるは大陸の出來事にて、かくて戦前の中國までもが余の記憶になれり。日中國交回復より幾年か後、滿洲醫科大學を卒業せる醫師、藥劑師健在なれば、かやうなる人どもを通じて余と同窓なる中國人との世代を超えたるささやかなる交流も生まれたり。受け取れる日本語にて書かれし手紙の冒頭は「毛澤東主席の領導により繁榮がもたらされ」とありたるが常たり。かくささやかなる消息を通じ、白樂天にあらざり西遊記にもあらざる現實中國の余の眼前にやうやう現れむとはするか。

（令和三年十二月二十七日受附）

